

## 唐古・鍵遺跡の大型建物と豆谷和之さんの記憶

天理大学文学部教授  
桑原 久男 Hisao Kuwabara

田原本町に所在する唐古・鍵遺跡は、奈良県と京都大学による戦前の発掘調査により、弥生時代が稲作農耕文化の時代だと立証した歴史的な遺跡として知られている。さらに、1977年の第3次調査を契機に、奈良県と田原本町による継続的な発掘調査が実施され、近畿地方屈指の弥生時代の大集落遺跡だと明らかになった経緯がある。これまでの100次を超える調査では、集落を囲む大環濠や大型建物など、注目すべき遺構が数多く見つかり、土器や石器などの出土遺物も膨大だ。生活に密着する遺物のほか、青銅器の铸造に関わる道具類や絵画土器など、特筆すべき遺物も多数見られる。長い道のりを経て、唐古池を中心とした約10万㎡の範囲が国史跡に指定されたのは、平成11年(1999年)1月のことだった。

唐古・鍵遺跡を発掘すると、最も多く見つかる遺構は、ゴミ捨て穴、湧水層まで掘り抜いた井戸、柱を立てたと見られる小さな穴＝柱穴などだ。弥生時代の一般的な建物は、ちょうど伊勢神宮の建築と同じように、柱を直接土中に埋めて固定する構造をもつ。こうした掘立柱の建物は、遺跡の発掘調査では、ふつう、柱穴だけが規則的に並んで見つかることになる。建物の地上部分は失われ、また地中に埋められていた柱も、あるいは再利用のために抜き取られたり、またあるいは朽ち果てたりするので、柱穴しか残らないのだ。柱穴内部に埋まった土は、周囲の土とは色調や質感が異なるので、精密な発掘調査によって柱穴の輪郭の検出が可能になる。こうして柱穴の存在が明らかになり、その並びを分析することで今度は建物の存在が突き止められる。唐古・鍵遺跡で2度にわたって発見された大型建物も、やはり、そうした柱穴が並んだ状態で確認されたのだが、どちらも2つの点で通常の建物と違っていた。1点目は、建物を構成する個々の柱穴の大きさ、建物全体の規模ともに、他と比べて、ずば抜けて大きかったことだ。2点目は、複数の柱穴で、柱の根元が抜き取られず、腐らずにそのまま残っていたことだ。

平成30年(2018年)春にオープンした唐古・鍵遺跡史跡公園には、国道沿いのエントランス近くに、ガイダンス施設を兼ねた遺構展示情報館が設置された。その建物内には、2号大型建物跡の発見当時の状況が再現され、柱穴、柱根、建物全体の大きさをリアルに感じることができる。情報館に入っただけで、見学者の目にとまるのは、通路近くの柱穴の脇に、発掘調査で使うさまざまな道具が無造作に置かれていることだ。土を掘るスコップ、土を削るジョレンやガリ、排土を運ぶテミ(手箕)、出土遺物を取るコンテナ、高さや



写真1 再現された大型建物跡の調査風景

長さを知るスタッフ(箱尺)など、発掘現場でおなじみの道具に加え、柱穴や柱根の形状を手作業で細かく記録した実測図も

並べられている。その実測図をよく見ると、方眼紙の上側には、唐古・鍵遺跡第74次調査のスタンプが押され、Pit104Eと、柱穴の番号が記されている。また方眼紙の下側には、「豆谷実測、99年11月5日」の表記があり、特徴的な筆跡から、紛れもなく、発掘現場で2号大型建物の柱穴のひとつを実測した図面の実物だとわかる。実測を行ったのは、今は亡き豆谷和之さん。私が学生時代、唐古・鍵遺跡の発掘調査にアルバイトとして参加していた時の後輩で、心のおけない長年の友人だった。

唐古・鍵遺跡の発掘調査を通して、弥生時代研究の道を志した豆谷さんは、奈良大学を卒業後、山口大学の大学院に進んで研鑽を積んだ後、田原本町の文化財専門職員に着任し、唐古・鍵遺跡をはじめとした町内の遺跡調査に邁進した。唐古・鍵の大型建物を2棟とも発掘したのが豆谷さんで、平成11年11月、2号大型建物の超大型の柱根をクレーンで引き抜く作業をした際には、私にも声をかけてくれ、作業の様子を学生たちと一緒に見学させてもらったのだ。ウレタン材で保護しながら、慎重に引き抜かれた柱根は、まるで1トン爆弾のような形状で、豆谷さんの計測では、直径が実に83cmと、平城宮跡で用いられた柱材よりも太いものだった。また、柱材に用いたのが、平城宮跡ではほとんど見られないケヤキ(槻・櫟)だったことも重要だ。巨大なケヤキ材を用いることに何か特別な意味があったのだろうか。大阪府の池上曾根遺跡で平成8年に見つかった大型建物跡の柱材は、ヒノキを用いていたので年輪年代法で伐採年代が紀元前52年と判明したが、唐古・鍵の場合は、ケヤキ材なので年輪年代法を利用することができなかった。考古学的に見ると、唐古・鍵の2号大型建物は、池上曾根と同じく、弥生時代の中期後半だ。

さて、この2号大型建物が発見された第74次発掘調査は、平成8年(1996年)～平成16年(2004年)にかけて実施された範囲確認



写真2 引き抜かれた大型建物の柱材と豆谷和之さん

調査の一環で、豆谷さんは、その調査報告書の作成にも腕を振った。その後、発掘調査現場を離れた豆谷さんは、今度は、史跡公園の整備事業の担当となり、力を尽くされたのだったが、道半ばの平成25年(2013年)12月10日、47歳の誕生日を目前にして、病のために帰らぬ人となった。今年の春学期は、私が担当する授業「弥生時代の考古学」もオンラインで行うこととなり、毎年、学生たちと訪れていた唐古・鍵考古学ミュージアム、唐古・鍵遺跡史跡公園の遺構展示情報館のどちらも、6月1日(月)まで閉館の状態となっている。今春は、豆谷さんの図面を目にすることができないが、こうして文章に記すことで、彼を偲ぶすがとしたい。